

Sydney2000 陸上競技を見て

宮下 憲

A report on Sydney 2000 Track and Field Athletics

Ken Miyashita

はじめに

現在、エリートスポーツ競技者はオリンピックサイクルと呼ばれる4年間サイクルを用い、オリンピックの場で競技力を十分に発揮できるよう組織的にトレーニングを積み、競技を続けている。

昨年開催されたシドニーオリンピックに本学体育研究科を卒業し、ミズノに勤務している谷川聡君が110mハードルの日本代表選手に選考され、筆者も形式上専任コーチとなったことから、彼の活躍振りをつぶさに見届ける

ために単身渡豪した。といっても、日本のデレゲーションに加わったわけではないので、一陸上競技観戦者としての報告となることをご了承いただきたい。以下にシドニーオリンピック陸上競技全般を見た感想を若干の資料と共に記すことにする。

メダルの行方

オリンピック全競技種目でのメダルの行方を大陸別にみると(図1・2)、全メダル数の54%に相当する502個をヨーロッパの諸国が獲得し、続いて北・中央アメリカとアジアがそ

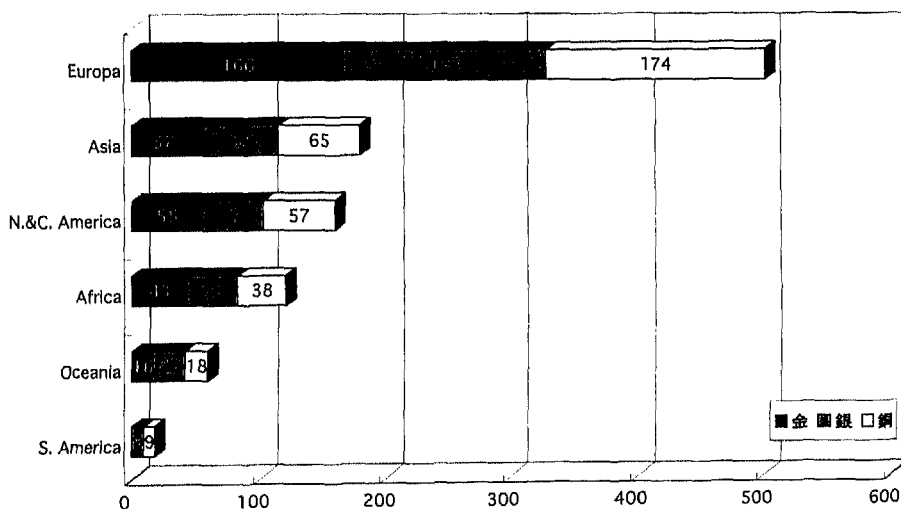


図1 シドニーオリンピック全競技種目の大陸別獲得メダル数

れほど違いなくおよそ全体の6分の1でそれぞれ160個と150個、その後、オセアニア(62個)、アフリカ(35個)、南アメリカ(19個)の順で続く。いかにメダルがヨーロッパ諸国に渡っているのかが分かる。旧ソ連の崩壊によって多くの民族によって独立した国々が増え、この傾向に拍車を掛けているものと考えられる。

次に陸上競技のみのメダルの行方をみると(図2・3)、やはりヨーロッパの獲得数は全体の44%である68個と多いが、北・中央アメリカが29%(32個)と全競技種目で見たものと比べアジアを抜きヨーロッパとの差を縮め

ている。続いてアフリカが全体の20%(28個)と全競技の80%に相当する28個を陸上競技にのみで獲得し、アジアを抜き陸上競技での活躍が大きくクローズアップされた。逆にアジアのメダル獲得数は全競技の獲得状況から見て大きく減少している(5個)のが目立つ。従って、陸上競技ではヨーロッパが主役となるものの、米国、アフリカの活躍が目についた競技会であった。

国別のメダル獲得状況を見ると(表1)、男女合計で米国がトップで20個、その内訳は金10、銀4、銅6個である。続いてロシア、エチオピアと続く。前回アメリカは地元開催で

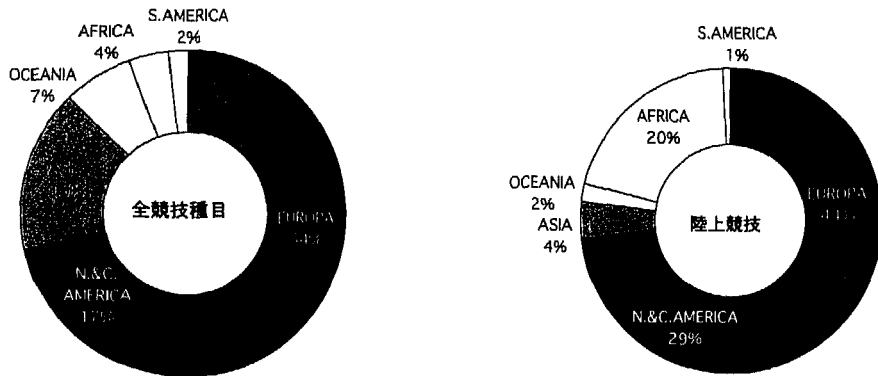


図2 シドニーオリンピックにおける大陸別メダル獲得数の割合

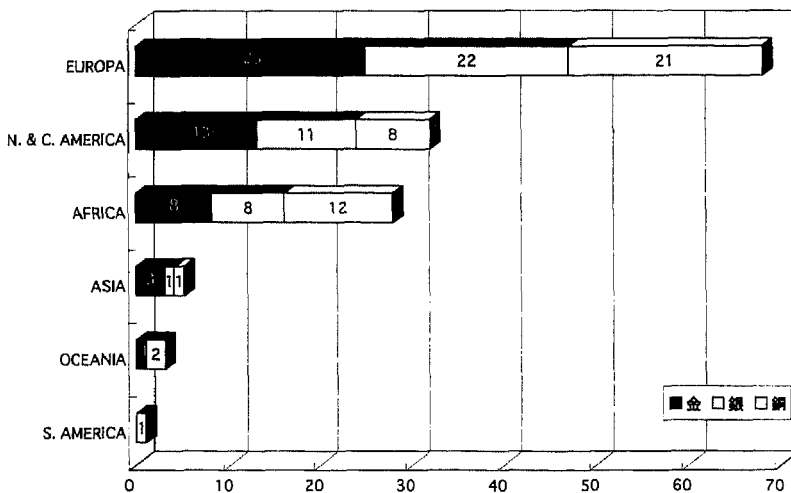


図3 陸上競技における大陸別メダル獲得数

表1 シドニーオリンピック陸上競技における国別メダル獲得数

【Total】					【Men】					【Women】				
	金	銀	銅	計	国	金	銀	銅	計	国	金	銀	銅	計
USA	10	4	6	20	USA	6	4	3	13	USA	4	0	3	7
ETH	4	1	3	8	ETH	3		2	5	RUS	2	4	1	7
POL	4			4	POL	3			3	BLR	2		2	4
RUS	3	4	5	12	KEN	2	3	1	6	ROM	1	2	1	4
KEN	2	3	2	7	CUB	2	2	2	6	NOR	1	2		3
CUB	2	2	3	7	GBR	1	2		3	ETH	1	1	1	3
GBR	2	2	2	6	CZE	1	1		2	AUS	1	1		2
GER	2	1	2	5	GER	1	1		2	BAH	1	1		2
BLR	2		3	5	RUS	1		4	5	GBR	1	0	2	3
GRE	1	3		4	EST	1			1	GER	1	0	2	3
ROM	1	2	1	4	FIN	1			1	ALG	1			1
AUS	1	2		3	GRE	1			1	BUL	1			1
NOR	1	2		3	LTU	1			1	CHN	1			1
ALG	1	1	2	4	ALG		1	2	3	JPN	1			1
BAH	1	1		2	MAR		1	2	3	KAZ	1			1
CZE	1	1		2	MEX	1	1	2		MOZ	1			1
BUL	1			1	TRI	1	1	2		POL	1			1
CHN	1			1	AUS	1			1	JAM		4	1	5
EST	1			1	BRA	1			1	GRE		3		3
FIN	1			1	DEN	1			1	ISL		1	1	2
JPN	1			1	ITA	1			1	AUT		1		1
KAZ	1			1	KSA	1			1	ITA		1		1
LTU	1			1	LAT	1			1	RSA		1		1
MOZ	1			1	NGR	1			1	CUB			1	1
JAM		4	2	6	RSA			2	2	ESP			1	1
ITA		2		2	BAR			1	1	KEN			1	1
MAR		1	3	4	BLR			1	1	MAR			1	1
RSA		1	2	3	JAM			1	1	POR			1	1
ISL		1	1	2	UKR			1	1	SRI			1	1
MEX		1	1	2						SWE			1	1
TRI		1	1	2						UKR			1	1
AUT		1		1										
BRA		1		1										
DEN		1		1										
KSA		1		1										
LAT		1		1										
NGR		1		1										
UKR			2	2										
BAR			1	1										
ESP			1	1										
POR			1	1										
SRI			1	1										
SWE			1	1										

あり、男子のみで金メダルを10個取っていたことから、今回の男子の凋落振りが大きかったことを示している。男女別に見ると、米国がそれぞれトップであるが、男子ではケニア、キューバとメダル総数では続き、エチオピア、ポーランドが金メダル数で続く。女子ではロシアが数の上では米国と並んでいる。かつての陸上王国であるドイツや英国、フラ

ンス、イタリアといった国々のメダル獲得数の減少とロシアの頑張り、そしてアフリカ諸国がその地位を固めつつあることを物語っている。

総合力は男子がアメリカ、女子ではロシアがトップ

国内で行われるインターカレッジの対校得点方式（1位8点、2位7点、・・・7位2点、

8位1点とする)で大陸別の総得点を集計し、その総得点に対する割合を見ると(図4)、メダル獲得数に対する割合と大きな差がない。北・中央アメリカが4%少ないのを除くと残りの大陸の変化は1から2%である。従って、メダルの獲得数が陸上競技界の勢力を見る尺度になりそうである。

次に、入賞者を大陸別に種目群に分けて得点を集計すると(表2)、大陸別の特徴が顕著に出現していることが分かる。短距離、ハードル、リレーのスプリント系は北・中央アメリカの独壇場、中距離では優勝はアフリカ勢

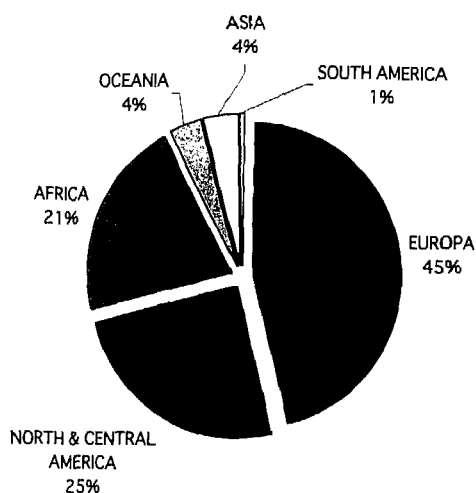


図4 陸上競技における大陸別獲得点の割合

が多く、ヨーロッパが続き、北・中央アメリカが下位にわずかに入賞している。長距離は圧倒的にアフリカ勢が強く、ヨーロッパとアジアが下位を占めている。競歩は男子はポーランド、女子では中国が優勝、メキシコも多くの入賞者を出している。跳躍種目はヨーロッパと北・中央アメリカが強く、今回はオーストラリアが下位入賞者を多く出して活躍が目立った。投てき種目は圧倒的にヨーロッパ諸国が強く、北・中央アメリカが続いている。混成競技はヨーロッパの独壇場であるが、米国がその一角を崩している。女子は入賞は全てヨーロッパ勢が占めた。以上のように、種目群でかなり特徴的な大陸別の色分けができ、人種や気候、地理的条件そして伝統といった要因によって、種目に対するより高い適性を持つ選手が存在が顕在化しつつあるように感じられた。

国別の獲得点(表3)を男女合計でみると、上位から米国、ロシア、ドイツと続いている。10位以内に北・中央アメリカ3ヶ国、ヨーロッパ4ヶ国、アフリカ2ヶ国、そしてオセアニアのオーストラリアである。男子を見ると、米国がトップで、2位ケニアに2倍以上の得点差となっている。2位ケニアと7位ドイツ間で16点しか差がなく総合力が接近している。女子はロシアがトップで米国、ドイツと続く。

表2 大陸別・種目群別獲得点

【Men】										
Continent	Sprint	Hurdle	Relay	Middle	Long	Walk	Jump	Throw	Multi	Total
Europa	31	14	16	30	25	48	69	110	26	369
N.&C.America	65	41	38	4	0	15	50	26	10	249
Africa	3	6	7	37	117	0	8	8	0	186
S.America	8	4	7	0	0	5	0	0	0	24
Oceania	0	0	1	0	0	4	17	0	0	22
Asia	0	7	3	0	2	0	0	0	0	12
【Women】										
Europa	24	23	23	44	45	22	105	115	36	437
N.&C.America	60	28	37	6	0	4	21	24	0	180
Africa	5	13	7	22	50	0	11	0	0	108
S.America	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Oceania	13	0	4	0	0	2	7	5	0	31
Asia	6	8	1	0	13	8	0	0	0	36

注：男子100m及び800m各1名はゴールせず

表3 国別獲得点ベスト10

【Total】	country	point	【Men】	country	point	【Women】	country	point
1	USA	185	1	USA	129	1	RUS	86
2	RUS	132	2	KEN	61	2	USA	56
3	GER	100	3	GBR	59	3	GER	55
4	GBR	95	4	CUB	50	4	JAM	50
5	CUB	89	5	ETH	47	5	ROM	42
6	ETH	83	6	RUS	46	6	CUB	39
7	KEN	79	7	GER	45	7	GBR	36
8	JAM	62	8	POL	35	8	ETH	36
9	POL	61	9	MAR	26	9	BLR	31
10	AUS	53	10	RSA	24	10	AUS	31
:			:			:		
27	JPN	15	34	JPN	5	24	JPN	10

10位以内にヨーロッパが5ヶ国と半数を占め、北・中央アメリカが3ヶ国、アフリカのケニアとオセアニアのオーストラリアが入っている。1位ロシアと2位米国の間には30点の差があるが、2位から4位ジャマイカまでには6点の差しか無く、総合力が非常に接近している。我々の最近の経験では100点を獲得するとインカレでの総合優勝争いに加わることができるのであるが、かなり多くの種目で優勝や入賞者がいなければ100点を超すことはできない。米国男子の総合力はメダルの数こそ減少したものの、依然として抜き出たものである。女子では金メダル数では米国に劣るものの獲得メダル数では同じであるロシアが下位入賞が多く、2位米国に30点もの大差を付けている。また、旧ソ連であったベルラーシが9位で31点を獲得していることから、旧ソ連以来の遺産を引き継いでいるとみることが許される。

記録は低調

今回の大会ほど記録的な収穫が少なかった大会も珍しいのではなからうか(表4)。世界記録は見られず、オリンピック記録は形式的には男子2種目、女子5種目で計7種目となっているが、実質男女各2種目(男子:1500

表4 陸上競技において樹立された新記録

◎世界記録 なし

◎オリンピック記録

- ・男子1500m (3) : 3' 32" 07
- ・男子やり投げ (2) : 90.17m
- ・女子5000m (12) : 14' 40" 79
- ・女子10000m (6) : 30' 17" 49
- ・女子PV (1) : 4.60m 一新種目
- ・女子HT (1) : 71.16m 一新種目
- ・女子JT (1) : 68.91m 一新規格

◎オリンピック最高記録

- ・男子20KmW (3) : 1' 18' 59"
- ・女子マラソン (3) : 2' 23' 14"

注: カッコ内は実数

M・やり投、女子5000m・10000m)で4種目のみである。女子5種目のうち3種目が新種目(棒高跳、ハンマー投)あるいは新規格の種目(やり投)であるからだ。男子のやり投も新規格になってから2度目のオリンピック大会ということであるから、オリンピック新記録は実質中長距離種目のみであるといってもよい。また、オリンピック最高記録はロード種目に適用されるが2種目で、女子マラソンと男子の20km競歩である。このように記録的な成果は中長距離種目に集中していた感が

ある。記録低調の要因を挙げると、まず、南半球開催の困難性が考えらよう。北半球主導のオリンピック開催からすれば、北半球の競技シーズンに可能な限り接続させねばならない苦慮の末、まだ肌寒い早春の開催となったのではなかろうか。日中の温暖な時間帯は陸上競技にとって休憩時間となり、夕刻から始まる競技会の観戦は頭上に遮るものがなければ頭がジンジンするほど寒かった。従って、中長距離種目に記録的な成果が多く出現したものと考えられる。次に、走路が柔らかかったということを選手がよく言っていた。更に、ウォーミングアップ場と本競技場で走路の硬度差があったことも明らかにされ、選手はより柔らかい走路で競技したことになったことは不幸であった。記録の出方からいえば、中長距離種目や女子選手に合った走路の硬度であったと考えられる。更に、出場した選手からは風の方向が定まらなかったことが集中力や力の発揮にマイナスの影響を与えたと聞くことが多かった。競技場のスタンドはこれまでにない11万人収容の巨大スタジアムであった。これは10階建ての建造物ほどの高さがあり、コーナー部分の観客席がとぎれているために風が各所で巻いていたのではないかと考えられた。高いレベルでの競技はスピードが大きいことから風の影響は馬鹿にならない程大きな影響を与えたものと考えられる。

自己記録更新率はメダル獲得率にほぼ相当

オリンピック前の新聞に英国がオリンピック競技会で自己新記録を出した選手に対し、その出身クラブを含めて表彰すると報じていた。いかに大舞台での記録更新が困難なのかを物語るものである。そこで、正式記録発表時に記される自己最高記録或いは自己最高記録に相当するような記載、例えば、国内新記録、大陸新記録を含めて集計し、その出現率を算出した(表5)。その結果、競技会を通じた全参加者のおよそ9%が自己記録を更新し、

男子の更新率は7%、女子では11%と女子の出現率が多少高くなっている。メダル獲得者の全参加者に占める割合はリレー種目とロード種目を除いて6.8%であるから、自己記録更新率と大差がない。男子はほぼ等しい。このようにしてみると、オリンピックというひのき舞台で記録更新することの困難性は、競技レベルに差はあるものの、メダルを獲得する確率と大差ないことになる。自己記録更新者に賞金を出そうとする英国の先見性は評価に値するといえる。オリンピック選手として選出されてから、非常に恵まれた条件下でトレーニングをし、その結果をきちんと出せることは当たり前のように非常に難しいこと

表5 シドニーオリンピック参加者のPB, SBの達成率

	Total	Men	Women
参加者数	1629	912	717
PB達成者数	145	64	81
%	8.9	7.0	11.3
予選	69	37	32
準決勝	15	6	9
決勝	61	21	39
SB達成者数	120	61	59
%	7.4	6.7	8.2
予選	63	39	24
準決勝	13	4	9
決勝	44	18	26
PB+SB	265	125	140
%	16.3	13.8	19.5

・PB:自己最高記録、SB:シーズン最高記録をそれぞれ示す
 ・リレー、ロード種目(マラソン、競歩)を除く

表6 種目別PB達成率

Men	PB (%)	Women	PB (%)
10000m	29.4	800m	31.6
400mH	14.5	5000m	28.6
400m	13.2	10000m	22.0
200m	9.0	400m	17.5
J T	8.3	P V	16.7
800m	8.2	J T	14.3
Decathlon	7.9	200m	13.7
110mH	7.0	S P	12.0
S P	5.4	H T	10.7
100m	5.2	400mH	9.1
T J	5.0	T J	7.4
D T	4.4	100m	6.0
5000m	2.8	100mH	5.4
P V	2.8	H J	2.7
1500m	2.4	1500m	0.0
H T	2.3	L J	0.0
L J	1.9	D T	0.0
3000m S C	0.0	Heptathlon	0.0
H J	0.0		

である。選んだ側も選ばれた側も満足できるこのような表彰を大いに推進してもらいたいものである。また、種目別に自己最高記録の達成率を大きなものから順に並べると表6のようになる。中長距離種目で高く、パワー種目で低い傾向が明らかである。

なお、記録掲載時に記されるシーズン最高記録の出現率を算出すると、全参加者のおよそ7%であり、男子7%、女子8%となっている。従って、自己記録とシーズン最高記録とを達成した競技者の割合は全参加者のおよそ16%、男子で14%、女子20%であり、数字の上ではおよそ6人に1人の割合で何らかの記録的成果を挙げたことになる(表5)。

記録の低調さは裏腹に、スタジアムは10万人を越える観衆で朝から連日非常に盛り上がっていた。地元オーストラリア人のスポーツ好きと相まって学校や一部会社も休んで世界の祭典を楽しもうとしていたことが伝わってきた。家族連れも多かったし、また、競技開始前から席がすっかり埋まっていたのには驚いた。午前中は予選のみや混成競技が行われたり、ロード種目のゴールしか見られないのにも関わらず早朝から満員、オーギー Augie コールがあちこちからわき起こる。そして、最高に盛り上がったシーンは何といても、女子400m決勝で地元フリーマン選手が優勝した時と男子走幅跳決勝で地元トーリマ選手が逆転を狙った最終跳躍をした時であった。いずれも地元期待選手の出場とその活躍に対する声援であったが、11万人という体験したことのない大声援はゴーといううなり声のように感じられた。観客の期待とその期待に応えた選手の一体感には素晴らしいさを越えて羨ましさをも感じるものであった。国威発揚の機会と揶揄されるが、同じ時空を共有した者にしか味わえない至福の時間とすることができよう。選手は成し遂げたことの偉大さを観客はその場を作り居合わせた幸運を感謝したのである。

女性主役の大会？

今回のシドニー大会は女性主役の大会ではなかったと思われる。短距離では5冠を目指した米国のマリオン・ジョーンズ(写真上)が100m, 200m, 4×400mリレーで3個の金メダルを獲得し、国を背負って400mで地元優

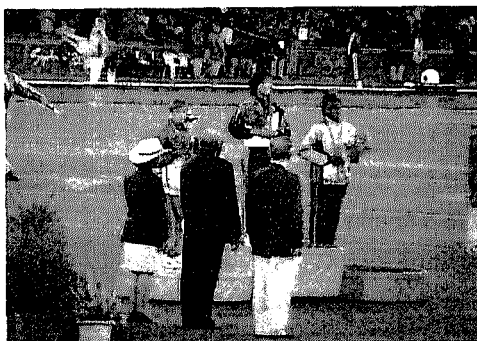
M.ジョーンズ (USA) 選手



P.フリーマン (AUS) 選手



高橋尚子選手



勝を成し遂げたオーストラリアのパシー・フリーマン(写真中),そして国民的な期待の中で完璧な準備をし完璧なレースでオリンピック最高記録で優勝したマラソンの高橋尚子(写真下)と女性選手の活躍が目立った大会といっても良い。また、棒高跳やハンマー投げも新たにオリンピック種目として加わり、初代オリンピックチャンピオンが誕生した。オリンピックに初めて女性が参加した1928年のアムステルダム大会から72年が過ぎたが、水濼のある障害物競走のみがオリンピック種目としてまだ認定されていない。既に欧米でそのレースも行われており、近い将来、男女同じ競技種目数になるであろうことが予測される。いよいよ男女差のない種目構成となり、チャレンジする機会の均等化が図られ、主役の座を女性が占める確率も漸増することになる。

日本選手の活躍の跡

表7は日本代表選手のオリンピック大会での最高記録を自己最高記録とオリンピック優勝記録との比較から達成度をみたものである。日本人選手の自己最高記録からみた平均達成度は男女で97.3%,男子97%,女子98%であった。種目によって異なるが、達成記録が最高記録の2%以内であればほぼ競技的なトップフォーム(マツヴェーエフ(1985),村木(1994))を示し、最適レディネスの状態で競技をしたと云われている。女子は集団として何とかトップフォームに近く、男子は集団として多少できが悪かったことを示している。また、優勝記録に対する達成度をみると、男女共平均で95%台であった。

オリンピックの優勝者、女子マラソンの高橋選手の自己達成率は99%,入賞した10000m高岡選手は自己新で100%を越え実力を十分に発揮したといえる。また、女子マラソン8位の山口選手は96%台と多少達成度が低いが、ロードレースであり、レース展開やコース構成でかなり記録的には変化が生じることから

単純な達成率の当てはめが必ずしも適切かどうか問題の残る部分ではある。しかし、他の種目と比べてもなお日本女子選手として史上初の金メダルを獲得した高橋選手のできの良さが理解できる。男子トラック種目ではベストを出すかほぼベスト記録を出せない限り、入賞は難しいことが分かる。男子の5000mや10000mの優勝タイムが悪かったためにいずれも98%以上の達成率を挙げているが、更に優勝記録の98%以上の達成率を挙げることができると、入賞の可能性が出てくることがハンマー投げなど入賞に近かった種目でみることができる。その際の自己の達成度が98%以下であっては入賞の可能性が低いと思われる。このところ入賞を果たしていた女子の長距離トラック陣はトップフォーム下限の準備状態を示し、必ずしも準備状態が悪かったのではなく、今回世界のスピードに立ち遅れを示し、入賞者を出すことができなかつたとみることができる。こうしてみると、今後女子マラソンの他に男子の短距離や長距離、ハンマー投げに入賞の可能性がみえてきたことは資料が語ると共に、日本人選手の戦い振りをつぶさに見て感じるものであった。

日本のコーチ体制

日本の水泳陣はそのレベルが高いことから、ワンツーマンの指導体制を敷き、それぞれがベストと思われる最終調整をして競技会に臨んだことが知られている。一方、陸上競技は入賞の期待される種目コーチのみがデレゲーションに加わり、その線から漏れた種目のコーチにはIDさえ渡らなかつた。また、積極的に個別コーチを伴って戦うという体制が伝わってこなかつた。結果論ではあるが、優勝記録に対する達成度を見ると、代表選手を輩出した種目に大差はなく横一線である。今回ブロックコーチが役員に入らなかつた跳躍陣の出来が非常に悪かつたことは明白である。現在、役員や選手の費用に関してはそれほど大

表7 日本代表選手の自己最高記録・優勝記録に対する達成率

選手名	種目	自己最高記録	OG	自己最高に対するOG%	優勝記録	優勝記録に対するOG%
伊東浩司	100m	10.00	10.25	97.6	9.87	96.3
伊東浩司	200m	20.16	20.56	98.1	20.09	97.7
川端伸吾	100m	10.25	10.39	98.7	9.87	95
小島茂之	100m	10.20	10.59	96.3	9.87	93.2
末統慎吾	200m	20.67	20.37	101.5	20.09	98.6
小坂田淳	400m	45.69	45.88	99.6	43.84	95.6
山村貴彦	400m	45.81	46.25	99.0	43.84	94.8
田端健児	400m	45.69	46.59	98.1	43.84	94.1
高岡寿成	5000m	13.13.40	13.29.99	98.0	13.35.49	100.7
高岡寿成	10000m	27.49.89	27.40.44	100.6	27.18.20	98.7
花田勝彦	5000m	13.23.49	13.41.31	97.8	13.35.49	98.7
花田勝彦	10000m	27.50.46	27.40.44	100.6	27.18.20	98.7
犬伏孝行	Marthon	2.06.57	DNF			
川嶋伸次	Marthon	2.09.04	2.17.21	94.0	2.10.11	94.8
佐藤信之	Marthon	2.08.48	2.20.52	91.4	2.10.11	92.4
谷川 聡	110m H	13.55	13.74	98.6	13.00	94.60
山崎一彦	400m H	48.26	50.15	96.2	47.50	94.70
為末 大	400m H	48.99	61.81		47.50	76.80
河村英昭	400m H	48.91	50.68	96.5	47.50	93.70
柳澤 哲	20K m W	1.19.29	1.25.03	93.5	1.18.59	92.9
池島大介	20K m W	1.19.42	1.25.34	93.1	1.18.59	92.3
今村文男	50K m W	3.49.38	4.13.28	90.6	3.42.22	87.7
小池昭彦	50K m W	3.50.14	DQ			
吉田孝久	H J	2.31	2.15	93.1	2.35	91.5
横山 学	P V	5.70	5.55	97.4	5.9	94.1
森長正樹	L J	8.25	7.84	95.0	8.55	91.7
渡辺大輔	L J	8.12	NM			
杉林孝法	T J	17.02	16.67	97.9	17.71	94.1
室伏広治	H T	80.56	78.49	97.4	80.02	98.1
			男子平均	96.8 (為末を除く)		95.0 (為末を除く)
志水見千子	5000m	15.09.05	15.48.20	95.9	14.40.79	92.9
田中めぐみ	5000m	15.17.92	15.39.83	97.7	14.40.79	93.7
市川良子	5000m	15.20.53	15.23.41	99.7	14.40.79	95.4
高橋千恵美	10000m	31.27.57	31.52.59	98.7	30.17.49	95
弘山晴美	10000m	31.22.72	32.07.68	97.7	30.17.49	94.3
川上優子	10000m	31.09.46	31.27.44	99.0	30.17.49	96.3
市橋有里	Marathon	2.27.02	2.30.34	97.7	2.23.14	95.1
高橋尚子	Marathon	2.21.47	2.23.14	99.0	2.23.14	100
山口衛里	Marathon	2.22.12	2.27.03	96.7	2.23.14	97.4
金沢イボンス	100m H	13.00	13.11	99.2	12.65	96.5
今井美希	H J	1.94	1.92	99.0	2.01	95.5
太田陽子	H J	1.94	1.94	100.0	2.01	96.5
	PBn=	4	女子平均	98.3		95.7
	PBn%=	10.5	全体平均	97.3 (為末を除く)		95.2(為末を除く)
備考	リレー種目を除く		DNF:途中棄権			
	太字は入賞者		DQ:途中失格			
	OG:オリンピックでの最高記録		NM:記録なし			
	PBn:自己最高樹立者(自己タイを含む)の数					
	PBn%:自己最高記録樹立者の日本人参加選手に対する割合(%)					

きな問題とはならないし、強化の方針でも個別コーチの位置づけをかなり明白にしていると思われる。そのような意味で今後個別コー

チ体制を徹底して、オリンピックというような特別な舞台での活躍を期してもらいたい。そして、オリンピックに関しては徹底した茅

つり方式の強化策を採用するべきである。単一民族の競技力はピラミッドではなく台形に近い、従って、誰かが世界への扉を開けなければならないのである。突出した個別コーチングの成果を事例的に集め、その情報をフローさせることによって底辺の引き上げに結びつけるような強化体制が今後重要であると思われる。これからの種目も選手とコーチが世界の仲間入りをし、情勢を肌身に染みさせ学んで行くプロセスが重要だ。本格的な個別コーチングが日本の土壌に育つシステムを統括団体は意識的に試行し、実践していくことが望まれる。

おわりに

オリンピックは4年に1度の世界規模の祭典である。古代ギリシャのオリンピック開催時のように世界の休戦状態を作り上げるとはいかないが、平和裏に開催され、世界最高を目指す選手が一同に参集し競技を繰り広げた。近代オリンピックの祖、クーベルタン男爵は一堂に会した青年を将来の世界のリーダーとして教育しようと企てたのである。しかし、

現状は余りにも勝敗に固執し、また、商業主義やメディアの力に圧倒されている感が否めなく、彼の理想とはかなり乖離したものとなってしまうのは残念である。しかし、競技力の向上はスポーツ文化の向上に他ならない。その過程で人そのものが疎外されないように配慮されることが重要だ。人間科学の粋を動員し、果てしない人類の挑戦が続く限り、終わりのない努力が傾注されるであろう。その莫大なエネルギーをプラスに昇華する人類の英知がある限り、オリンピックは前進を続けるのではあるまいか……。と雑感しながらも、やはり、お祭りはその場に参加し己の五感をもって体感してこそ本当に楽しめるものであることや我々コーチは肌身でオリンピックレベルの競技力を感知することの重要性を改めて感じながら帰国の途についた。良い経験をさせていただいたことに感謝しつつ報告とする。

(本内容はつくばスポーツサイエンスセミナー「シドニーオリンピックを語る」にて発表したものをもとに記した)